

きっかけは駄目目で送った1通のメール。

佐藤仁美 [46期]



左：卒業制作「Heart Washing Room」
右：修士制作「Sense of Field」

2016年5月末に「designboom」に「Sense of Field」が取り上げられ、同年12月には同メディアのインсталレーション部門でもトップ10入り。卒業間もないOBたちを見ていると小さな個展などから地道に創作活動を行う人が多い中で、世界的なアート系メディアにアタックしようと思ったのはどういった経緯からだったのでしょうか？

まず「designboom」に掲載される前の3ヵ月間、ロンドンに留学をしていて、そのときも翻訳した簡易的なポートフォリオを10冊程度持って行って配るなどしていたんですね。それで現地のアーティストやクリエーターたちとつながって、ロンドン在住の日本人アーティストの方に修士制作「Sense of Field」を紹介する機会があって、その流れて作品に音楽を編集し

てもらったことになったんです。「Sense of Field」は体験型の大きな作品ということもあって取り壊すことも考えて最初から動画にしていたので、コラボレーションというカタチでその動画に音楽を編集してもらい、一つのプロモーションムービーを作りました。

それだけで予定していた3ヵ月があっという間に過ぎてしまっ、そのまま日本に戻って、じゃあ次どうしようかと考えていたときに、まずは「YouTube」と「Vimeo」に動画を公開することにしました。分かったはいましたが、バズらない限りは大きな反応が見えにくいこともあり、次の一手を考えていた際、「まあ、だめかもしれないけど、とりあえず送ってみよう」と駄目目で「designboom」にメールを送ったんです。

佐藤仁美 Sato Hitomi

アーティスト/二級建築士

2013年武蔵野美術大学建築学科卒業。2015年同大学基礎デザイン学科大学院修了。光や色を使った空間インсталレーションを軸に活動を展開。主な受賞歴に武蔵野美術大学修了作品優秀賞、2016年「Lexusdesigbaward」shortlist、「三菱ケミカルジュニアデザイナーズアワード」受賞、「designboom TOP10 reader submissions of 2016-art installations」入選など。

シェアしてくれたのも大きかったと思います。あとは「designboom」にメールを送る際、コンセプトなどを書いて送ったんですが、掲載された説明文が私の書いたコンセプトと異なる表現になっていたのはとても新鮮でした。要は、編集部解釈で作品の説明が書かれていて、目の肥えた他者に作品が紐解かれていくというのはとても刺激的な経験でしたし、メディアというプラットフォームに載せたからこそ得られた貴重な体験でしたね。

作品掲載後は、具体的にどういった展開になっていったんですか？

国内のアート系メディアや海外でも有名どころであれば「Dezeen」など選抜肢は色々あると思います。が、「designboom」を選んだ理由は？

大した理由は特になくて。ただ「designboom」から返信がなかったら「Dezeen」には送ろうと思っていましたが……メールした翌日には、自分でも目を疑いましたが、作品が掲載されていて。それをきっかけに海外のギャラリーなどからプロジェクトの相談や展示のオファーなどの連絡が続々と舞い込んできて忙しくなり、他媒体へのアプローチは一旦ストップしました。一気に世界中に拡散したきっかけは間違いない「designboom」ですが、そこで作品を見てくれた人たちが「Pinterest」や「Instagram」などに

SNSなどを上手く活用するのはこれからのアーティストのプロモーションとしては重要なことかもしれない。佐藤さんは、作品をしっかりとローカライズしたり、さまざまなチャンネルに積極的に公開したりするなど、プロモーションに力を入れているという印

象を受けたのですが、その点はどう考えていますか？

修士制作の「Sense of Field」にしろ、卒業制作の「Heart Washing Room」にしろ、私の作品はどうしても大きくなりがちで(笑)、場所の確保や制作時間、制作資金、どれをとっても大変なんですね。そういったことから、あまり作品を作れないのが現状で「私はこういうことをやってきました」とプレゼンテーションするには少々不十分という意識があって……なので、日頃からアイデアをラフでもいいからカタチにしてストックするようにしています。ラフだとしても誰かの視線に触れることはあるでしょうから、極力SNSなどで公開するようにもしていますね。

それとロングスパンで物事を考えていて、自分が今どういう状況にいて、どういことをするべき期間なのかということに常に意識しています。私の現在までに当てはめると、ムサビから卒業後のロンドン留学までの期間は畑を耕す期間で、今は種をまいて大事に育てているみたいな感じかな？ いつか花を咲かすかもしれないから、アイデアのストックも重要だと考えています。現にネット上に公開すれば反応してくれる人はい、作品化できる手応えを感じます。そういった流れから、今現在、都内に新たに建つお寺の天井に光のアートを恒久的に設置するプロジェクトが実際に動いていて、2017年5月くらいには完成予定です。

一旦SNSという土壌に種(アイデア)をまいてみて、他者の反応を見る。真似されるリスクもあるとは思いますが、得られるものも多そうですね。最後に、今後の展望を教えてください。

まずは海外での展示を実現させたいです。やっぱりSNSなどで見るのと実物の作品を体験するのは雲泥の差なので、海外展示を行って、海外の人たちが私の作品にどういった反応を示すのか見てみたいです。そのためには、今以上に創作活動に邁進していきたいと思っています。

ありがとうございました。

二拠点活動を通して建築の可能性を広げる。

小津誠一 [23期]



上：中古ビルをリノベーションしたホテル「HATCHi」の飲食店「a.k.a.」
下：大型の金澤町家を再活用した「八百萬本舗」

ムサビを卒業して4年後に独立し活動の拠点を東京、京都と場所を変えながら、現在は金沢を中心に活動をし、建築設計チームを中心に不動産チーム、設計から派生した4軒の飲食店や物販店の運営チームを率いています。建築業界からは、“多角経営者”などと呼ばれ、建築を軽んじる存在だといわれることもしばしば。けれども、僕は建築の可能性を広げていくために今の活動をしていると考えています。

建築の定義の前提となる土地や建物、その不動産にコミットせずして建築を語るのだろうかという疑問から始めた「金沢R不動産」。そして、創りあげた空間を場として営んでいく実践的活動としての飲食店や物販店の企画運営。空間を発見・創造・実践するというサイクルを実現し、空間づくりのハード・ソフト・OSという仕組みをデザインしていくことが、建築には欠かせないと思っています。

卒業後、二度のバブル経済崩壊と大震災を経て、国家や社会が小さく弱くなっていくことを体感しながら、設計事務所勤務や大学非常勤講師を務め、細々と個人事業で設計事務所をスタートさせました。思い返せばその頃、純粋に建築のカタチの力を信じて、建築に関わっていたように思います。

そして、金沢21世紀美術館の開館が呼び水となり、東京と金沢の二拠点活動を始め、金沢では建築を周辺から耕していくような活動へと変貌してきました。過去形の街が現在進行形の街へと変わっていく中で、プロジェクトを自ら起こしていくことが建築活動を活性化していくこととなり、そのような活動のフィールドは地方でこそ求められています。それは地理的にも活動領域的にも中心ではなく周縁に立つことで、見てきたもの。

思えば学生時代、一般総合大学などをフツ大(笑)などと呼び、自らエッジに立つことを良しとする当時のムサビの空気は、とどのつまり自分を相対化することを学ばせ、敷地や用途すら規定されない自由な設計課題では、自ら設問する力が鍛えられました。そんな学生時代の経験が、自分を取り巻く環境や社会の変化に対し、自らの仕事の在り方を考える力を育ててくれたように思います。

2016年度日月会企画イベントの報告

4月16日 | フォルマフォロ・セミナー第12回

「土に還る、くさる家のつくり方」

林 美樹 [16期]/Studio PRANA 代表

対談：江原 久紀/左官職人

司会進行：鈴木 明 [10期]/武蔵野美術大学教授

2013年に「くさる家に住む」を出版した林 美樹さんを招き、自然素材を用いた住宅「くさる家」の設計に対する思いと手法をお話いただきました。対談は協同する左官職人の江原久紀さん。レクチャーと対談の後、会場で実際に竹小舞を組み、土壁塗りの実演とセミナー参加者の体験コーナーなども実施しました。

7月9日 | 日月会建築賞

太陽賞：「RHYTHM」渡邊 和

満月賞：「丘の下美術館」伊藤愛希

三日月賞：「記憶の重層」重名秀則

新月賞：「距離感の積層」井出彩乃

七夕賞：「青空の家」松田聖人

審査委員長：七田紹匡 [21期]/自給自足家(エコヴィレッジみより)

ご挨拶

酒向 昇 Sako Noboru

日月会会長 [21期]

更田邦彦前会長より2013年4月に会長職を引き継ぎ、間もなく2期4年の任期が終ろうとしています。この間に、武蔵野美術大学建築学科は設立50周年を迎え、日月会と研究室では2冊の記念誌を企画・発行しました。総勢60人に及ぶ会員へのインタビューを中心とした編集作業を通じて、ムサビの卒業生が建築にとどまらない多方面で活躍している姿と母校愛を実感しました。また、発起人を始め、多くの会員の方にはご協力や寄付をいただき、2014年9月には、鷹の台キャンパスに450人を超える来場者を迎えて、学科設立50周年記念式典を盛大に行うことも出来ました。

そのほか、定例の日月会活動にも変化がありました。春の進路相談会では、卒業生の活躍の広がりに応え、NPO代表の卒業生に声をかけ、新たな進路の可能性を示していただきました。フォルマフォロセミナーでは、講師を若い世代の先輩にシフトしてきています。

小林 敦 Kobayashi Atsushi

事務局長 [18期]

審査委員：黒田和司 [7期]/NEU総合計画事務所 代表

浅利幸男 [27期]/ラプアーキテクチャー 一級建築士事務所 代表

佐々木 将 [29期]/横総合計画事務所 建築・都市設計勤務

伊藤友紀 [40期]/伊藤友紀建築研究所 代表

7月11・17・31日 | 実測学校

「旧東海道・品川宿、まち歩きと実測」

10月29日 | ホームカミングデイ

「分断されたキャンパス・14号館見学会」

保坂陽一郎名誉教授のご逝去のお知らせ

武蔵野美術大学名誉教授であり日月会名誉会員の保坂陽一郎先生が2016年12月28日に肺炎のため永眠されました。享年82歳。心より哀悼の意を表するとともに謹んでお知らせ申し上げます。なお、葬儀は昨年に家族葬にて執り行われております。ご厚志、弔問、お悔やみなど固くご辞退されておりますので、ご配慮いただきますようお願いいたします。

[表紙写真]

14号館

[編集後記]

ムサビキャンパスの大改革をはじめ、若手卒業生の活躍など2016年度は見出しを飾るにふさわしい大きなトピックスがたくさんありました。本誌をきっかけにして新たにできた14号館を訪ねるもよし、卒業生同士で交流を深めるために日月会主催のイベントに参加してみるもよし。本誌が母校に足を運ぶ動機付けの一つとなれば幸いです！[JT]

編集：瀧澤純希

デザイン：小田権史

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：武蔵野美術大学建築学科

同窓会・日月会

http://www.nichigetsukai.com

東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学建築学科研究室内

Forma-Foro

17 フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2017 | VOL.17



上・下：14号館見学会の様子(撮影：竹島兄人)

[表紙写真]

14号館

[編集後記]

ムサビキャンパスの大改革をはじめ、若手卒業生の活躍など2016年度は見出しを飾るにふさわしい大きなトピックスがたくさんありました。本誌をきっかけにして新たにできた14号館を訪ねるもよし、卒業生同士で交流を深めるために日月会主催のイベントに参加してみるもよし。本誌が母校に足を運ぶ動機付けの一つとなれば幸いです！[JT]

編集：瀧澤純希

デザイン：小田権史

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：武蔵野美術大学建築学科

同窓会・日月会

http://www.nichigetsukai.com

東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学建築学科研究室内



3人のムサビOBに聞いた キャンパス「分断」の過去・現在・未来

2016年春、武蔵野美術大学に14号館が竣工。
都市計画道路（通称：小平3・3・3）により南北に分断された鷹の台キャンパス。
それは50年以上の歴史があるキャンパスにとっての大改革といっても過言ではない。
今号では、14号館建設に関わった3人のムサビOBに集まっていたが、
「キャンパスの分断」をテーマに座談会を開催した。
そこから見てきた、まだ見ぬムサビキャンパスの可能性とは？

小倉康正 Ogura Yasumasa [18期]
左前：1988年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻建築コース修了。笠間の菊まつりプロジェクト代表、武蔵野美術大学非常勤講師。著書に建物評伝「アトリエの奥 武蔵野美術大学3号館」など。

富重法生 Tomishige Norio [18期]
左後：1988年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻建築コース修了。～2010年株式会社フジタ（設計エンジニアリングセンター 主席コンサルタント）、日経アーキテクチュア創刊750号記念コンペ最優秀賞。

岩下泰三 Iwashita taizo [15期]
右：1984年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻建築コース修了。同年、新妻欣美建築研究所入所。1988年スペースラボ設立。現在、武蔵野美術大学・東京理科大学非常勤講師。

ムサビの在り方とは？ 鷹の台キャンパスの基本原則を紐解く。

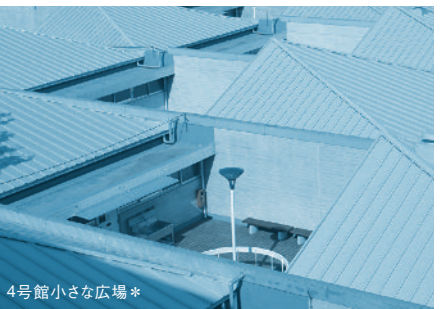
Keyword

- ①：建物と空地の関係性
- ②：拡張性
- ③：4号館というモデル

——14号館を紐解いていくため、まずは改めて既存キャンパスとはどういうものなのかを振り返ってみたいと思います。

岩下：皆さんも知つてのとおり、鷹の台キャンパスはしっかりとした軸線が引かれています。これは昔から議論されてきたことで、いわば前提条件みたいなものですが、プロジェクトが本格始動する前に、まず宮下勇名誉教授（建築学科1期生）を中心とした「キャンパス構想計画準備チーム（以下、準備チーム）」というものが編成されました。私と小倉さんはその準備チームとして、さまざまなことを検討・検証していたんですね。その中で、モノを作る人たちのキャンパスの在り方として、「『建物』と『空地』の関係」が非常に重要な機能を果たしているという部分をいくつか見つけたんです。つまり、建物が「塊」として鎮座しているだけの状況ではなく、建物と空地が常にセットである状況が重要で、その関係性を14号館にも引き継ぐことができるんじゃないかと思ったんですね。

富重：そうですね。鷹の台キャンパスは2本の軸線と建物、広場の関係がやはり面白いですね。建物でい



えば、軸の貫通があり、なおかつ中央広場に面した、初期の4つの建物が重要だと思います。さらにいえば、その中でも最初に竣工した4号館です。6つある螺旋階段を上ると、それぞれに小さな広場をもち、面した部屋へとさらに分散する動線と構成は、中央広場や外部空間の、図式的な再現のような気がします。歴史的にも4号館がキャンパスの変遷の起点にあって、グリッドや群の構成が、その後拡張するキャンパスの環境形成に影響を与えていると思います。

小倉：10号館の閉じた中庭と教室の関係性も、積層した4号館という解釈ができるかもしれませんね。そこには4号館から14号館にまでつながる系譜があるのではないかと思います。

「小平3・3・3」が貫通 キャンパス分断の解法とその効能を探る。

Keyword

- ①：軸線の死守
- ②：ギャラリーキャンパス
- ③：居場所の多様性

——14号館を語る上で欠かせないのが「道路」の存在です。道路上に位置していた体育館前のケヤキ並木の対処や分断による軸線の歪み、動線の再

なっています。これは歩くことに高揚感を感じさせてくれる、独特なものだと思います。

——分断後、再度キャンパスをつないだことで大きなサーキュレーションが生まれましたね。

小倉：宮下先生が『mauleaf』（2016年6月発行、vol.21）で「ギャラリーキャンパス」というキャンパス計画の一つの指針となっている言葉を引いていましたが、私の理解では二つの意味があって、一つはギャラリーをキャンパスの中に点在させるということ。今回のプロジェクトでいうと、12号館地下展示室から地下通路を通して14号館展示室へ。その後、地上に出て横断歩道を渡り、南キャンパスへ戻るというサーキュレーションです。もう一つは、工房やアトリエそれ自体がギャラリーであるという視点ですね。14号館は原則的にガラスで仕切られていて、制作風景を廊下から見る事ができるというようになっています。



岩下：もう一つ大きな問題としてあったのが、体育館前のケヤキ並木。これは切り倒しではなくて移植したんです。元気な状態で移植できたので育つのも早そうですね。

小倉：そうですね。これもただの移植ではなくて、分断されたキャンパスをつなぐことに一役かっています。ケヤキは道路の両サイドに植わっていて、育っていくと枝葉が広がり、噛み合うことで南と北のキャンパスが景観上つながる。動線や景観を利用することでキャンパスの一体感を強めていますね。

岩下：あとは居場所の多様性が担保されたのもよかったです。美術館前の芝生をみると、大勢の学生たちが座ってランチを楽しんでいます。一方で、体育館の鬱蒼としたケヤキ並木の足元でも食事をしている学生がいたんですね、意外に人気だったというか（笑）。なので、そういった居場所がなくなってしまうという思いがあったので、木々が移植されたのはよかったです。ただ、それだけではあんなともいえない鬱蒼とした空間は再現できないのですが、新たにパーゴラなどが設えてあって、育てば多少なりにもあの雰囲気をもう一度作ってくれるかなと期待しています。

小倉：私としては単に木が植わっているというものではなくて、やっぱり武蔵野の雑木林の面影みたいなものが浮かび上がってきて欲しいと思っています。

岩下：検討段階で「林」というキーワードが出て、方向性がある程度見えてきたときに「雑木林」というのと「屋敷林」、二つのイメージが議論されましたね。今は、まさに両方が成立するような折り合いがつけ

られています。ケヤキによる屋敷林的な側面とその内側にもう少しいろいろな種類の木が生えてきて、そこが「武蔵野の森」のような様相を呈するという感じですね。

ア ジールのような空間が、 学生たちの創造性を刺激する。

Keyword

- ①：アジール
- ②：サイトスペシフィック
- ③：ムサビの原風景

小倉：林のような空間についていうと、あの場所は名前が決まっていらないんですね。呼び方が難しい……ときには庭といったり、名称だけでなく用途も曖昧な感じがしています。もともと女子寮だった旧2号館には中庭があったんですが、そこはほとんど管理



されていなくて、半ば無法地帯——アジールのよう場所になっていたんです。そういう場所がかつては敷地境界沿いや図書館ができる前のオープンスペースの中にあって、学生たちがいろいろな使い方をしていたんです。モノを作る人たちにとってアジールのよう場所って大事な気がしていて、そういう意味でも曖昧な空間が再び生まれたことは学生たちのクリエイティビティを刺激してくれるのではないかと思います。南キャンパスはどんどん都市化され、管理されたスペースになってきています。それに比べて北キャンパスには、まだ緩さがある。ここでアジールのような場所が育てくれば、という気持ちがありますね。

岩下：枯葉が積もっているところとそうでないところがあるじゃないですか？ あの枯葉が積もっている状態が良いと思うんです。枯葉が積もっている地面に陽が当たらなくなって、雑草がほどほどに抑えられる。そうなると良い塩梅の場所になると思うんですね。

富重：やっぱり、そういう寛容な空間という包容力のある空間は大事ですね。聞いた話ですが、今年も穴を掘りたがる学生がいたらしいです（笑）。
一同：笑。

富重：その学生たちですが、「分断」についてはマイナスだが仕方ないと考えているようでした。しかし昭和37年の都市計画決定以降、少なくとも体育館建設時にはリアルな道路計画として配置の中に盛り込まれていたはずなので、突然分断が始まったわけではなく、前向きにとらえる視点も必要だと考えました。そこで事後的に気づいたことがあって、8号館の吹抜けを中心に円を描くと、4号館、鷹の台ホール、



体育館がその中心から等距離に配置されていました。それを見て道路の有無に関わらず、キャンパスの中心らしきはそのままだ、キャンパスも相変わらず一体感が保たれると直感しました。むしろ体育館の並びに14号館ができ、道路も見えてきて全体配置が明快になったという印象です。また先ほどの寛容な空間とも関連しますが、今回は道路に沿って歩道状空地とベンチが設えてあります。それらと一緒に公共空間を活用できるだけの社会性を学ぶ場となれば、マイナスイメージも払拭できると思います。

——最後に、今後14号館がどのように使われていくことを期待しているかご意見をお聞かせください。

岩下：設計は日本設計ですが、企画設計的なことに

